

ヒョウタンから「おぎゃあ！」

(標本番号H210155、高さ22cm 幅14cm 奥行14cm)

関 雄二

研究戦略センター

南米アンデス地帯は、原産地だけあって、文様を施したヒョウタンは、じつに四五〇〇年も前から知られている。その後、ヒョウタンは漁網につける浮きとしても利用されたが、一九世紀になつてから、この作品のように民衆芸術作品の素材として注目され、また観光土産として流通するようになる。乾燥させたヒョウタンの表面を磨き、下絵に彫刻刀で刻みを入れ、地の明褐色



つ、黒めがねをかけた怪しげな男性を見てみよう。手につかむ動物は、やや大きめながら、世界で唯一家畜化された食用モルモットであるクイ(テンジクネズミ)のようだ。クイは、料理のほか、呪術でもよく用いられ、解剖して、病気の原因などを突き止めることが知られている。つまりこの男性は呪医ということになるう。

ベッドの際に座る女性も祈りを捧げている。

と芯の白い部分、そして燃えさしをあて、焦がしてできる黒色部分とを対比させ、祭りや日常生活などさまざまな場面を表現する。技術こそ単純だが、描く図案は緻密である。

足下に広げた布には、乾燥させたココ(コカノキ科の植物)の葉が見える。ココの葉はアンデスの儀礼には欠かせず、口に含んだり、他の用具とともに布の上に広げられ、儀礼に供せられることが多い。いずれも安産を祈願しての行為であるう。

表紙写真では、ベッドに横たわる農民女性の出産前の場面が描かれている。しかし周囲にはアンデスの儀礼的要素もちりばめられている。まずは、腹をさわっている夫らしき人物の傍らに立

ここに揚げた写真は、裏面の出産後の場面。いずれも上部には、トウモロコシの醸造酒であるチチャを保存するための壺が見える。チチャ酒も、アンデスの祭りや儀礼に不可欠な存在である。めでたいときに酒、というのは、どこでも変わらぬ習慣らしい。